

# 小学校道徳科における「ふるさと教育」 — 「ふるさと」への見方・考え方の高まりに留意して—

内田 誠\*\*\*・丸橋 静香\*\*\*・大島 悟\*\*\*

Makoto UCHIDA, Shizuka MARUHASHI, Satoru OSHIMA  
Moral Education as Community Education of Elementary School

## ABSTRACT

鳥根県では「ふるさと教育」が地域とのつながりの中で展開されている。ふるさと教育を充実したものとするために、本研究では小学校中学年の道徳科でのふるさと教育をセルマンの視点取得理論を手がかりに構想・実践し、その効果を児童の「ふるさと」への「見方」や「考え方」の高まりに着目して明らかにする。道徳科の授業前と授業中、そして授業後の児童の記述内容の変化からは児童の視点取得段階が高まる姿が明らかとなり、最終的には授業参加者全員の、中学年で目指したい他者視点の獲得が判定された。視点取得段階が高まるにつれて、ふるさとである地域への見方や考え方が、「地域のよさへの気づき」から「地域にこめられた昔の人の願い」、「地域への愛着や誇り」、「地域へ発信したり参画したりして地域に貢献しようとする意欲の獲得」へと高まっていくことが明らかとなった。

【キーワード：道徳教育，ふるさと教育，小学校，見方・考え方，発達段階，視点取得】

### はじめに

新学習指導要領（小学校2020年度、中学校2021年度全面実施）では、社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現がめざされている。こうした全国的な教育改革の流れをふまえ、鳥根県でも鳥根の子どもに身につけてもらいたい力を「主体的に課題を見つけ、様々な他者と協働しながら、定まった答えのない課題にも粘り強く向かっていく力」とし、地域社会との連携・協働と学校段階間の接続を大切に「教育の魅力化」の取組を推進している<sup>1</sup>。

既に鳥根県では、2005年度より「ふるさと教育」が行われ、地域の教育資源を教科等のねらいを達成するために取り入れ、ふるさとへの愛着や誇りの醸成、地域に貢献しようとする意欲の喚起などをめざした学習が行われてきた。鳥根県のふるさと教育においては、地域の人々とともに自然体験や社会体験等を通じて、子どもたちに地域社会の一員としての自覚を持たせ、社会性を育むこと、また地域課題に正対することでふるさとへの貢献意欲を育むことが目指されている<sup>2</sup>。

それでは、こうしたふるさと教育を充実したものにするためには、どのような方法が考えられるだろうか。すでに述べたように様々な地域での経験をとおして、教科の学習における地域素材の活用が考えられるが、本稿では小学校道徳科でのふるさと教育を考えてみたい。

道徳科では、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に捉え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳性が養われる。一方ふるさと教育では、鳥根県の「ふるさと教育基

本方針」で記されているように、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成が目指される<sup>3</sup>。それゆえ、自己の生き方を深める学習を通して学ぶ道徳教育を、ふるさと教育の基盤の一つとして位置づけることは重要であると言えるだろう。

そこで、本研究では、小学校道徳科でのふるさと教育を、児童の「見方」の発達に関する理論を手がかりに構想・実践する。そして、授業をとおした、児童の「ふるさと」への「見方」や「考え方」の高まりについて検討する。従来、ふるさと教育に関して児童の発達段階に留意することは指摘されてきたし、もちろん実践のなかでも考慮されてきた。ただ、理論を踏まえた構想・実践がなされてきたとは言い難く、それら授業の工夫が効果的だったのかについての検証ができにくかった。したがって、本研究のように、発達段階という観点から構想・実践し、その効果を測ることは、今後のふるさと教育の質を高めていくための基礎資料になりうるという点で有意義であると考えられる。

なお、本稿で検討するのは、鳥根県雲南市のA小学校4年生の道徳科での「ふるさと教育」の授業である。

### I 児童の発達段階を考慮した「ふるさと教育」・「道徳教育」の構想

#### (1) セルマンの視点取得理論

授業構想にあたっては、人の見方がどのように発達するかを理論化したセルマン (Selman, R.L.) の役割取得理論を取り上げる。加藤 (2007) は、子どもの社会認識

\* 鳥根大学大学院教育学研究科教育実践開発専攻 院生

\*\* 鳥根県雲南市立大東小学校

\*\*\* 鳥根大学大学院教育学研究科教育実践開発専攻

2018年10月30日受付

2018年12月5日受理

構造の発達について、セルマンの理論を取り上げ、児童期における認知的視点取得能力の発達の様相、視点取得と社会認識の発達との関連の検討から明らかにしている<sup>4</sup>。ふるさと教育においても同様に、児童が地域課題に向き合って探究活動を深めていくためには、地域の歴史や特徴、地域の人の立場などの時間や空間を捉える社会認識能力、視点取得能力が必要となる。このような点を踏まえ、本研究においてもこのセルマン視点取得段階論を参照することとした。

セルマンは、相手の立場に立って心情を推しはかり、自分の考えや気持ちと同等に他者の考えや気持ちを受け入れ、調整し、対人交渉に生かす能力である「役割取得能力」がどのように発達するかを明らかにしている。セルマンは、子どもにおいて彼／彼女の視点と他の人の視点が分化し、視点間の調整がなされていく構造的変化の過程を整理している。セルマンが示した社会的視点取得能力の発達段階とその概略は次の通りである。段階0（4～6歳）は、自分の視点と他者の視点を分化できない自己中心的な役割取得段階。段階1（6～8歳）は、自分の視点と他者の視点を分化できる主観的役割取得段階。段階2（8～10歳）は、自分の視点を他者の視点から考慮できる自己内省的役割取得段階。段階3（10～12歳）は、自分と他者の双方を考慮する第三者的視点をとることができる相互的役割取得段階。段階4（12～15歳以上）は、自分の視点を社会全体や集団全体をみる視点と関連づけることができる慣習的、象徴的役割取得段階である<sup>5</sup>。

そこで本稿では、このセルマンの発達段階論を、日本の小学校の段階に即して、低学年（6～8歳）は自己中心的な視点取得段階、中学年（8～10歳）は他者の視点をとることができるようになる段階、高学年（10～12歳）は自他相互の視点を第三者的に客観的にとらえられるようになる段階とひとまず見なすこととする。

## （2）ふるさと教育の段階ごとのねらい・キーワード

セルマン理論の視点取得段階をふまえ、ふるさと教育の各学年でのねらいを表1のように考えた。低学年（6～8歳）は、自己中心的な視点取得段階である。よって、地域のよさについて自分の興味や関心に基づく、自分と

のかかわりの中だけで捉え、町のよさを個々に捉えている段階であると言える。また、地域のひと・もの・こととの触れ合いを通して自分の町のよさを感じるようになる段階なので、「地域のよさを知り好きになる段階」とする。中学年（8～10歳）は自己の視点を持ちながら、他者の視点もとれるようになる段階である。そのため、自分の周りの地域の人々の見方に気づき、したがって地域や環境の特色にも目がいくようになり、また昔の人々の願いなどにも目が向き、郷土のすばらしさが実感できるようになる段階であると考えられる。したがって「地域を知り地域の人の思いや願いに気づく段階」とした。高学年（10～12歳）は自他の見方を客観的にとらえることができるようになる段階である。それゆえ、多様な視点をもてるようになり自分たちの町や地域のよさを捉えられるようになるため、積極的に地域とかかわっていきこうとする気持ちがもてるようになる段階と考えられる。したがって、「地域のためにできることを考えて発信する段階」とする。

こうした観点から、道徳科での、各段階でのふるさと教育での留意点を次のように考えることとした。低学年では「○地域の人に守られている／○好きな町・町のよさ／○町の人々の思いや願い」。中学年では「○誇りに思う町／○昔の人々の思いと引き継ぎ守る人々の思い／○受け継がれている」。高学年では「○愛着／○町のよさ（特長や特色）を生かし、地域をよりよく育てていこうとする人の思い／○よりよい町に」である。

また、一般にふるさと教育の学習活動の大半を占める「生活科」「総合的な学習の時間」のねらいも、このような発達段階を考慮し考えておく。低学年の生活科のねらいは「地域とふれ合う楽しさやうれしさを感じ、幸せな町のよさを知る」、中学年の総合的な学習の時間のねらいは「調べて地域の人々の思いや願いに気づき、幸せに過ごせる町作りのよさに気づく」、高学年の総合的な学習の時間のねらいは「活動して地域の人々の思いにより深く触れ、幸せな町作りへの思いを発信する」である。

以上を整理した本研究でのふるさと教育のねらいの一覧が表1である。

表1 セルマン理論視点取得段階をふまえた「ふるさと教育」の段階ごとのねらい

小学校発達段階	低学年	中学年	高学年
セルマンの視点取得理論	自己中心的な視点取得段階（6～8歳）	他者の視点をとれるようになる視点取得段階（8～10歳）	自他相互の視点を客観的に捉えられる視点取得段階（10～12歳）
ふるさと教育のねらい	地域のよさを知り、好きになる。	地域を知り、地域の人々の思いや願いに気づく	地域のためにできることを考えて発信する
道徳科での地域の見方（キーワード）	○好きな町・町のよさ ○町の人々の思いや願い ○地域の人に守られている	○誇りに思う町○昔の人々の思いと引き継ぎ守る人々の思い ○受け継がれている	○愛着○町のよさ（特長や特色）を生かし、地域をよりよく育てていこうとする人の思い○よりよい町に
生活科・総合的な学習のねらい	地域とふれ合う楽しさやうれしさを感じ、幸せな町のよさを知る。	調べて地域の人々の思いや願いに気づき、幸せに過ごせる町作りのよさに気づく。	活動して地域の人々の思いにより深く触れ、幸せな町作りへの思いを発信する。

## II 授業の実際

### (1) 地域と学校の実態

島根県雲南市でも、2008年に「夢発見プログラム」(キャリア教育推進プログラム)が策定され、地域社会と連携したキャリア教育が保育所・幼稚園・小学校・中学校・高等学校のつながりが意識されながら展開されている。また、各中学校区ではふるさと教育にかかわる共通題材例が示され、地域とのつながりを通じた実践が行われている<sup>6</sup>。

本研究の実践を行った島根県雲南市A小学校のある町は、「古事記」「出雲国風土記」にも記されている、古くから経済・文化が発達した地域である。産業は農林業が中心で、現在は兼業農家が大部分で、米・野菜・お茶などの特産品で町おこしに取り組んでいる。A小学校のある地区は、400年の伝統をもつ祭りや、中心を流れる川の清流に舞う蛸が有名である。校区には、総合センター、J A雲南、市民病院、体育館、図書館、福祉施設などの町の中核となる施設があり、また、商店やスーパーが集まっている。校区内の戸数は約1400戸で、教育への関心は高く、学校教育やPTA活動に協力的である。A小学校は、児童数222名、教職員数20名の中規模校であり、心に響く道徳の時間の工夫と道徳的な実践力を養う体験活動の実施による人権教育・同和教育を基底に据えた教育活動により「豊かな心の育成」が行われている。

### (2) A小学校におけるふるさと教育と関連付けた道徳教材

表1でまとめたような見通しのもと、本研究でのA小学校での道徳科の教材・ねらいは次のようにすることとした。なお、本研究の実践校は、すでに述べたように島根県雲南市に位置するため、同市が2018年度に採択している道徳科教科書『小学道徳 ゆたかな心』(光文書院)から選択する。低学年、中学年、高学年で一教材ずつ選択することとする。

低学年(2年生)では、「ぼくのまちも、ひかっている!」(「ゆたかな心」2年)を扱う。本教材は、物語の主人公が友達の町の祭りに参加したことで、祭りの歴史や人々の願いから祭りのよさに気づき、自分の町のよさを見直すきっかけになるという話である。町全体の歴史や人々の願い、町の人とのかかわりなどを通しての町のよさに気づききっかけとなる教材である。同教材の教科書が示す主題は「じぶんのまちのかがやき」であり、本研究において低学年で身に着けさせたい見方「町の人々の思いからの町のよさへの気づき」と合致している。

中学年(4年生)では、「ねがいをつみ上げた石橋」(光文書院「ゆたかな心」4年)を扱う。本教材は、物語の主人公が今まで何気なく見ていた地域の文化財である石橋について調べていく中で、地形的な困難を克服しようとして石橋を築いた先人たちの熱い思いや苦勞に気づくことができるという話である。地域に残され、現在でも大切に残されている文化財にこめられた人々の願い

から自分の郷土のすばらしさを知り、郷土のよさを見直し、郷土を大切にしていこうとする気持ちをもつきっかけとなる教材である。本教材の教科書上の主題名は「住むまちをほこりに思う心」で、本研究のキーワード「昔の人々の思いや願いから町を守るよさへの気づき」が取り上げられている。

高学年(6年生)では、「町おこしプラン」(光文書院「ゆたかな心」6年)を扱う。本教材は、物語の主人公が友達と「町おこしプラン」の企画を考えるが、話し合っているうちに、自分たちが町の特徴をよく知らないことに気づく。そして情報を集め、話し合いを進めるうちに、自分たちの町に愛着を感じていくという話である。自分たちの町の特徴や特色を捉え、地域へ積極的にかかわる思いをもたせるきっかけとなる教材である。この教材の主題名は「ふるさとのよさ」で、本研究の「町の特徴や特色の捉えから、地域への積極的なかかわりへの気づき」と合致している。

本稿では、中学年(4年生)の授業を実施し、その効果を測ることとする。

### (3) 学級の実態

授業実践を行う学級は4年生の学級で、児童数は20名である。

#### 1) 実態調査の方法と内容

本授業を行うにあたり、授業前の児童の視点取得段階を把握するため、実態調査を行った。視点取得段階を把握するために、[1. 自分の町の「よさの捉え」「愛着」「誇り」の把握の設問]、[2. 自分の町の「課題」の把握の設問]、[3. 自分の町への「地域貢献感」「地域に貢献しようとする意欲」の把握の設問]、[4. 地域とのかかわりの意識の把握の設問]の4種類を用意した。調査方法や内容は表2の通りである。

表2 実態調査の方法と内容

【検査方法】質問紙調査

【検査人数】16名

【回答方法】設問①～⑧は自由記述回答、設問⑨～⑫は、「はい」「どちらかといえばそうだ」「どちらかといえばそうではない」「いいえ」の四択から選択回答

【設問調査内容】

1. 町の「よさの捉え」「愛着」「誇り」の把握の設問(設問①～④)
2. 町の「課題」の把握の設問(設問⑤～⑥)
3. 町への「地域貢献感」「地域に貢献しようとする意欲」の把握の設問(設問⑦～⑧)
4. 地域とのかかわりの意識の把握の設問(設問⑨～⑫)

【設問項目】

- ①町のすきなところはどんなところですか。
- ②その、すきなりゆうを書いてください。

- ③町のじまんでできると思うことは何ですか。
- ④その、じまんでできると思うりゆうを書いてください。
- ⑤町が、もっとこんなふうになるといいなあと思うのはどんなことですか。
- ⑥そう思うりゆうを書いてください。
- ⑦今まで、地いきのためになにかしたことや、自分がしたこと地いきのためにになったなあと思うことを書いてください。
- ⑧地いきのために自分がしたことについてどう思いますか。書いてください。
- ⑨地いきの行事にさんかしている
- ⑩きんじょの人に会ったときにはあいさつをしている。
- ⑪地いきや社会で起こっている問題や出来事に関心がある。
- ⑫地いきや社会をよくするために何をすべきかを考えることがある。

## 2) 実態調査の結果

結果の詳細は、表3の通りである。4種類の設問への児童の回答から、本学級児童の視点取得段階が、次のように明らかとなった。

### 1. 町の「よさの捉え」「愛着」「誇り」の把握の設問の結果から

表3 <設問調査内容1. 町の「よさの捉え」「愛着」「誇り」の把握の設問（設問①～④）>

【設問①】町のすきなところはどんなところですか。	【設問②】その、すきなりゆうを書いてください。
川（2）	いろんな生き物や魚がいるから
ホテルがたくさんいる（1）	きれいだから
お茶がおいしい（1）	町には茶畑がたくさんあるから
地域の山（1）	緑がいっぱいあるから
グラウンド（1）	野球の練習ができるから。
虫や魚がたくさんいるところ（2）	虫が好きだから 虫とりや魚とりができるから
自然がたくさんあるところ（8）	生き物がたくいさんいてうれしいから。 見たこともない生物や虫、植物がたくさんいておもしろい。 家の近くにタヌキなどがきてうれしい お水がおいしい
安全（1）	大きな事件がないから

【設問③】町のじまんでできると思うことは何ですか。	【設問④】その、じまんでできると思うりゆうを書いてください。
ホテルがたくさんいるところ（8） ホテル舞う町	ホテルは少なくて、とったりしてはいけなから大切にしたい。 ホテルを見に行っているから。 ホテルは大東の宝だから 都会にはホテルがないから ホテルがいっぱいいるから2 夏にホテルを見に行ったらきれいだったから
お茶がおいしい（3）	よくお茶を飲んでいて、おいしいと思うから いつもおいしいお茶がのめる
地域の祭り（1）	お店がたくさんあって楽しい
やさしい人がたくさんいるところ（3）	初めて会っても親切だから 地域には、名人や優しい人がたくさんいる。 いつも町の人にやさしくしてもらっているから
コウノトリ（1）	（記述なし）
景色がいいところ（1）	（記述なし）

自分とのかかわりの中での地域のものの存在へのよさの捉え（自己中心的な視点取得段階）が分かった。少数ではあるが、地域の特色を捉えたり、地域の人とのかかわりをよさと捉えたりした児童もいた。

### 2. 町の「課題」の把握の設問の結果から

自分の生活の豊かさを基準とした自分とのかかわりの中での記述（自己中心的な視点取得段階）が多かった。少数ではあるが、町のよさや豊かさに触れる児童もいた。

### 3. 町への「地域貢献感」「地域に貢献しようとする意欲」の把握の設問の結果から

半数近くの児童が無回答であった。募金をしたという記述が多いのは、検査の途中で児童同士の情報交換があったからだと思われる。地域のことを意識したり、地域のために何かをしするという経験が少なく、地域まで意識できない自己中心的な視点取得段階にいる児童が多いと考えられる。

### 4. 地域とのかかわりの意識の把握の設問の結果から

設問⑨⑩の回答から、自分にかかわりのあることへの意識の高さが分かった。設問⑪⑫の回答からは、地域の出来事や地域のためにという意識は低く、やはり自己中心的な視点取得段階が明らかとなった。⑨～⑫の結果については表4で整理した。

<設問調査内容2. 町の「課題」の把握の設問（設問⑤～⑥）>

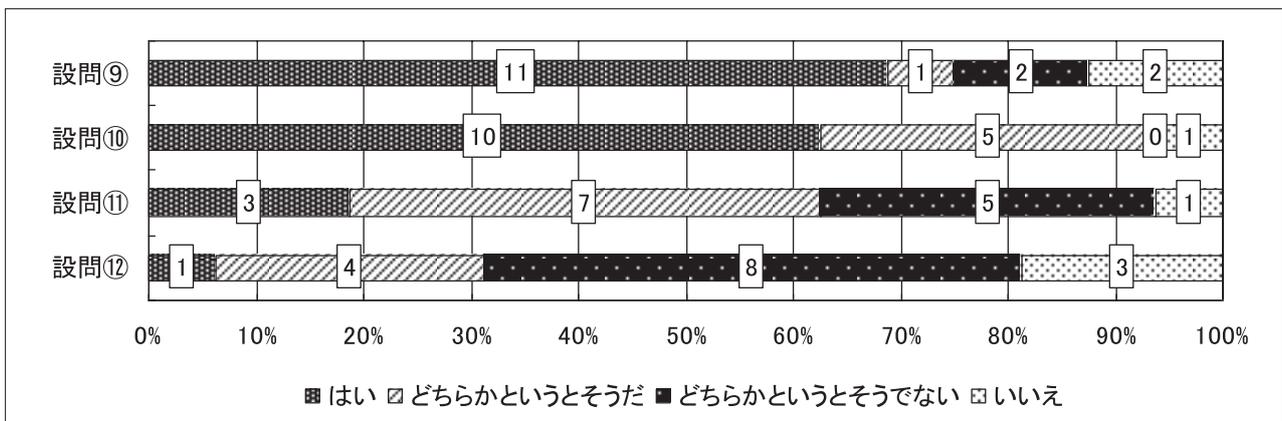
【設問⑤】町が、もっとこんなふうになるといいなあとと思うのはどんなことですか。	【設問⑥】 そう思うりゆうを書いてください。
本屋さんができてほしい（1）	本が好きで、いろんな本が読みたいから
高い建物があってほしい（1）	高い建物がないから
もっと人口がふえてほしい（1）	人口がふえると地域がもっとにぎやかになるから
水族館や動物園、公園、お店などができてほしい（4）	魚や動物が見たいから べりりだから お店や公園が少ないから にぎわってないから おもしろいから
お店が増えないでほしい（1）	都会になってほしくない
もっと自然に満ちた町になってほしい（1）	生き物や虫、植物が減ってしまうから。
広い町になってほしくない（1）	（記述なし）
川がもっときれいになるといい（1）	今でもきれいだけど、もっときれいになってほしい
ごみをごみばこにすてるといい（1）	もっと気持ちのよい暮らしにしたいから
大東のホテルを守ってほしい（1）	もっと気持ちのよい暮らしにしたいから
カフェができてほしい（1）	もっと気持ちのよい暮らしにしたいから

<設問調査内容3. 町への「地域貢献感」「地域に貢献しようとする意欲」の把握の設問（設問⑦～⑧）>

【設問⑦】 今まで、地いきのためになにかしたことや、自分がしたこと で地いきのためになったなあと思うことを書いてください。	【設問⑧】 地いきのために自分がしたことについてどう思いま すか。書いてください。
ホテルが住めるように川の水の検査（1）	（記述なし）
募金をした（8）	募金はいいなと思いました。 地域の人のために役立ってほしい
運動会のポスター作り（1）	たくさんの人に来てほしいと思ってがんばった。
保育園にひまわりの種をまいた（1）	（記述なし）

※（ ）内の数字は回答した人数

表4 <設問調査内容4. 地域とのかかわりの意識の把握の選択調査（設問⑨～⑫）>



3) 発達段階に応じた授業づくりの手立て

新学習指導要領での道徳の特別の教科化により、道徳科での指導については、その実質化を図るとともに質的転換が求められており、そのためには質の高い多様な指導方法の確立と評価の工夫・改善を行う必要が叫ばれている。道徳科の質の高い多様な指導方法として、次の3つが挙げられている<sup>7)</sup>。①「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」により教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通し、道徳的諸価値の理解を深めることができ、登場人物に自分を投影して、その判断や心情を考えることにより、道徳的価値の理解を深めることができる。②

「問題解決的な学習」により、児童一人一人が生きる上で出会う様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができる。最後に、③「道徳的行為に関する体験的な学習」により、役割演技などの体験的な学習を通して、実際の問題場面を実感を伴って理解することを通して、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができる。

以上の3点を踏まえ、本研究の道徳授業実践では児童の視点取得能力の発達を促すため、表5のような具体的な授業の手立てを考え、指導案を作成した。

表5 児童の視点取得能力の発達を促すための授業の手立て

- |   |           |
|---|-----------|
| <p>①自我関与中心の学習とするために</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・導入と終末で、児童に親しみのある地域の文化財を取り上げる。</li> <li>・ワークシートの工夫</li> </ul> <p>②問題解決的な学習とするために</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・めあての設定の工夫</li> <li>・板書の工夫（対比的に整理する）</li> <li>・文化財にこめられた昔の人々の願いから郷土のよさを見直す話し合い活動の展開</li> <li>・終末でのこれからの自分と町のかかわり方を考える場の設定</li> </ul> <p>③体験的な学習とするために</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・表現方法の工夫（ワークシートの活用、話し合いの形態の工夫）</li> </ul> | ・発問の仕方の工夫 |
|---|-----------|

### Ⅲ 授業の実践

児童の視点取得能力の発達段階に留意したふるさと教育に関連付けた道徳の授業を構想し、島根県雲南市内にあるA小学校の4年生の学級で実践した。具体的には、「ねがいをつみ上げた石橋」の授業を2018年9月26日（授業参加児童19名）に行った。

#### （1）資料について

資料「ねがいをつみ上げた石橋」は、大分県宇佐市院内町が舞台の物語である。この町に住むあつしは、家の近くの荒瀬橋を渡っているとき、東京から橋の写真を撮るために来ていたプロのカメラマンに自分の町のことをほめられた。うれしくなり、石橋のことをもっとくわしく知りたくなったあつしは、石橋ステーションへ行った。そこで、石橋に使う石のことや石橋の作り方、めがね橋の数では日本一であることが分かった。また、そんなにも石橋が多い理由は、大雨でも流されないじょうぶな橋をつくる必要があったこと、石橋の材料になる石や、りっぱな技術をもった石工たちがいるという「町の財産」を生かして石橋が作られていることが分かった。そして、その作業はとても難しく危険であり、本当に大変だったが、村の人たちが安心して生活できるようにしたいという昔の人の願いを知り、村の人たちにとってとても大切なものだから今でも残って使われていることを知る。あつしは、昔の人たちの願いがたくさん積み上げられていることに気づき、院内町の石橋をほこりに思うようになる。

#### （2）ねらいについて

本資料の主題は「住むまちをほこりに思う心」であり、本授業のねらいは、「郷土の文化財について理解し、郷土の文化財を大切にし、引き継いでいこうとする態度を育てる。」とした。

#### （3）展開について

本授業の展開は、次のようになった（表6参照）。

最初に、導入部分でA小学校の校区の代表的な3つの文化財の写真をクイズ形式で提示した。これらは、事前の実態調査で児童が挙げた「自分たちの町の誇りトップ

3」で、児童にとってとても身近なものである。3つの写真を見て、「全部町の有名なものだ」という児童の言葉から「町の自慢（よさ）」という言葉につなげ、本時のめあて「町の自まは、なぜ今でも続いているのだろうか？」を提示した。

次に展開部分では、まず教材の前段の場面のみを読み、「東京のカメラマンから自分の町をほめられたあつしは、どんなことを考えたでしょう。」と尋ねた。これは、地域のよさの存在への気づきを意図した発問である。ワークシートに自分の考えを書いた後にあつしの気持ちについて話し合い、あつしが初め、石橋を特別なすごいものとして意識していなかったこと、またほめられたことで自分の町のよさに気づいた気持ちに共感できるようにした。そして次に教材の後段の場面を読み、「石橋をほこりに思うようになったあつしは、どんなことを考えたでしょう。」と尋ねた。これは、地域の先人の願いに触れたよさへの気づきを意図した発問である。ワークシートに自分の考えを書いた後、あつしが感じ、気づいた「ほこり」の多様な理由についての児童の言葉をつなげる教師の発問や問い返しにより話し合いを深めながら、「石橋にたくさん積み上げられている昔の人たちの願い」と「守り続けていくことの大切さ」に気づくことができるようにした。その後まとめとして、教材前段の補助発問と教材後段中心発問の板書を比較しながら、あつしは石橋のことを調べていくうちに、石橋にこめられた昔の人の願いに気づき、これから大事にしていきたいと気づいたことを押さえた。

終末では、「私たちの町の自まは、なぜ今でも続いているのだろうか。」と尋ね、資料から自分たちの町に視点を移し、本時のめあてについての自分たちの納得解を話し合いを通して明らかにした。これは、教材と自分のつなぎと、今後の自分への生かしを意図したものである。そして、自分たちの町の自慢にも昔の人の願いがこめられ、守られ、今に続いていることを押さえた。そして、本時のふりかえりを書き、本時の価値への気づきや今後の自分の生活への生かしを確認できるようにした。

表6 「ねがいをつみ上げた石橋」の展開

時間	学習活動と予想される児童の反応	ねらいにせまるための教師の支援
5分	1 自分の町の文化財の写真を見る。 ・自分の町に関係あるものばかりだ。 ・自分たちの町っていいな。 2 本時のめあてを確認する。 「町の自まん」は、なぜ今でも続いているのだろう？ ・七夕祭り…（400年以上の歴史）楽しい、にぎやか ・ほたる…（250年の歴史）きれい、かわいい ・お茶…（250年の歴史）おいしい、茶畑が多い	・自分の町の文化財の写真を見せ、本時のめあてへつなげる。（価値への誘い） ・めあてを提示した後、写真を見て思いつくことを話し合う。「楽しい」「きれい」「おいしい」など（自己中心的な視点）以外にも理由がありそうなことを知らせることで、課題意識をもち、ねらいとする価値に迫っていきけるようにする。
25分	3 教材の前段を読み、話し合う。 （補助発問。I）東京のカメラマンから自分の町をほめられたあつしは、どんなことを考えたでしょう。 ・普通だよ。何でそんなに感動してるの？ ・そんなにすごいのか？きれいなのか？ ・この町って、そんなにめずらしいのか。 ・うらやましいなんて、うれしいな。 ・どうして石橋がたくさんあるんだろう。調べたい。 4 教材の後段を読み、話し合う。 （中心発問。II）石橋をほこりに思うようになったあつしは、どんなことを考えたでしょう。 （ほこりに思った理由） ・大雨でも流れない橋を作る為に考えたんだ。（願い） ・町の財産（豊富な石と立派な石工）を生かして作っているなんてすごく考えている。（工夫） ・難しく危険な作業でもあきらめずに作ったんだ。（苦労） ・危険でも、村や村の人のために作ったんだ。（願い） ・昔の人の願いがたくさん積み上げられている。（願い） ↓ ・だから、今でも残って、大切に使われている。（引き継ぐ） ↓ ・自分も大切にしていこう。 ・今度はぼくたちがこのすごさを守っていかなくてはいけない。（伝える・参画意識）	・あつしさんの地域のよさ（石橋が残されていること）を広く捉える。 ・資料の前段の場面を最初に取り上げ、あつしは初め、石橋を特別なすごいものとして意識していなかったことを共感的に捉えられるようにする。 ・ワークシートにあつしの気持ちを考えて書いた後に話し合うことで、あつしの気持ちに共感し、多様な考えを引き出せるようにする。 ・教材の内容を板書に残しながら読み、あつしの気持ちの変化した背景を考えられるようにする。 ・あつしが感じ、気づいた「ほこり」の多様な理由を基に話し合いを深め、「石橋にたくさん積み上げられている昔の人たちの願い」と「守り続けていくことの大切さ」に気づくことができるようにする。 ・板書を対比的に整理し、文化財に込められた町の人々の願い、苦労や努力に気づいたり、自分たちの町にも思いを巡らせて考えたりできるようにする。 ・「院内町の石橋」には、昔の人たちの願いが積み上げられており、そして今も大切に守られ（願いが積み上げられ）続けていることを押さえる。
10分	5 本時の学習のまとめをする。 「私たちの町の自まん」は、なぜ今でも続いているのだろう。 ・人々の願いがこめられている。 ・町の人にとって、大切なもの。 ・人々の努力で、昔からずっと守られ続けている。 「私たちの町の自まん」にも昔の人の願いがこめられ、守られ、今に続いている。	・本時で学習したことを基にグループで話し合うことで、本時のめあてに対する自分たちなりの納得解をもたせる。 ・考えを発表させることで、教材を通して捉えた道徳的価値を確かめ、内面的自覚につなげる。 ・めあての提示後に出た意見と比べ、本時の学習の成果を実感できるようにする。
5分	6 本時の学習をふりかえる。 （ふりかえり。III）今日の学習から学んだことや考えたことを書きましよう。 ・自分の町の自まんには願いがこめられている。 ・自分の町の自まんがいつまでも続いてほしい。 ・自分の町の文化財にこめられた願いを調べたい。 ・「昔の人の願い」を考えて守っていきたい。 ・自分も行事や守る活動に参加して守っていきたい。	・本時の学習をふりかえりながら自分と町の文化財のかかわりについて考え、ワークシートに書く。 ・振り返りを交流し、自分の町のほこりに思うものを大切に、守り継いでいこうとする態度へ気持ちを高める。 ・「昔の人たちのねがい」と「自分の願い」をつなげ、価値づける。

#### (4) 授業の結果と考察

実践した授業の結果について、授業中の発問に対する自分の考えの記述やふりかえりの記述内容、話し合い活動で観察された児童の様子から考察する。

授業の展開部分での最初の補助発問（Ⅰ.「東京のカメラマンから自分の町をほめられたあつしは、どんなことを考えたでしょう。」）、そして次の中心発問（Ⅱ.「石橋をほこりに思うようになったあつしは、どんなことを考えたでしょう。」）、そして授業終末のふりかえり（Ⅲ.「今日の学習から学んだことや考えたことを書きましよう。」）のそれぞれの児童の記述から、児童の見方を捉えた。この児童の反応は、児童に記入させたワークシートから読みとった。3つの記述を比較することで、児童の本時を通しての価値の変化、視点取得段階の変化を追うことができる考えた。

まず、表1に照らして視点取得の発達段階を判定するための指標を表7のように作成した。また、他者の視点を取得している者でも、その上での気づきには深まり・広がりには差があると考えられるので、それを三分した。

表7 判定基準

<p>④他者の視点をとれる視点取得段階 ～自他相互の視点の客観的な捉えに近い「地域貢献意欲・参画意識」への気づき分かる記述 (表現) 引き継いでいきたい、守っていききたい など</p>
<p>⑤他者の視点をとれる視点取得段階 ～「地域への愛着や誇り」への気づき分かる記述 (表現) 郷土の文化財を大切にしたい、もっと調べてみたい など</p>
<p>⑥他者の視点をとれる視点取得段階 ～「昔の人の思いや願いに支えられた町のよさ」への気づき分かる記述 (表現) 昔の人の願いがこめられていることへの気づきに関する表現</p>
<p>⑦自己中心的な視点取得段階 ～「自分とのかかわりの中だけでの町のよさ」への気づき分かる記述 (表現) 町のよさへの気づきに関する表現</p>

この基準により、児童の振り返りの記述から発達段階を判定し、まとめたものが表8である。最終的にふりかえりの記述を確認できた18人のうち、④段階に達した児童が5名、⑤段階に達した児童が10名、⑥段階に達した児童が3名で、全員が中学年で目指したい他者視点の取得が達成された。⑥段階の3名は、教材の石橋にこめられた昔の人の願いについては記述していたが、自分の地域の文化財にこめられた昔の人の願いについての記述は見られなかった児童である。

・授業後において「地域貢献意欲・参画意識」が見られた児童

A段階に達した児童の視点の変化をもう少し詳しくみてみると、児童①は授業終末の記述で、教材を通して捉えた地域の文化財にこめられた昔の人の願いを自分たちの地域の文化財に照らし合わせて考えることができている、さらに「次は自分たちがやらないといけないと分かりました。」と、強い参画意識が伝わる記述を行っている。ちなみに本児童は事前の実態調査時の視点取得段階は④であり、地域の行事にほとんど参加したことがなく、また地域をよくするために何をすべきか考えたことがほとんどないと答えていた。本時の授業を通し、最も視点取得段階が高まった児童と判定した。児童⑤は、事前の実態調査では、地域の行事によく参加しており、地域の問題や出来事に非常に関心をもっているが、自分の興味や関心の範囲に限られる理由から段階④と判定した。しかし授業では、教材の内容の読み取りから、他地域の題材でありながら自分事として捉え、「なぜ昔の橋のままなんだろう。」という疑問をもち(段階④)、そして昔の人の願いに気づき(段階⑤)、最終的には自分たちの地域の文化財も大切にしていきたい思いを本時の価値と照らし合わせて具体的に記述しており、段階⑤の視点取得にたどりついた。

児童②～④は、事前の実態調査で町のよさを自然の多さや地域の人々のやさしさなどの他者の視点で捉えており、段階④の獲得が判定できた。授業でも、早い段階で昔の人の願いや苦勞に気づいた共感的な発言を積極的に行い、授業終末では、「町の宝を守っていきたい」「大切に受け継いでいきたい」「昔の人の努力をむだにしないようにして大切にしていきたい」などの自分事として捉えた言葉で表現し、地域貢献への意欲が伝わる記述を行っており、視点取得段階④が判定できた。

・授業後「地域への愛着や誇り」が見られた児童

B段階へ達した児童の特徴をみてみると、児童⑥、⑦は授業中の中心発問の段階で「私も大切にしていこう」「橋は町の人の誇りだ」という記述が見られ、段階⑥と判定した。授業終末では、「町の自慢をもっと知りたい」「自分も町の自慢を大切にしたい」など、地域を大切に感じる、より深い町への愛着や誇りの獲得(段階⑥)に達したことが判定できた。児童⑧～⑪も授業終末で、地域への愛着や誇りを感じる記述が見られたが、自分から地域にかかわっていきこうという発信段階までは高まっておらず、地域への愛着や誇りの実感に浸っている様子が判定できた。児童⑫～⑮は最初の補助発問で町のよさに気づき(段階⑤)、次の中心発問で昔の人の願いや苦勞がこめられた町のよさを感じ(段階⑥)、授業終末では長く続いていることに関する記述から町に誇りを感じる記述が見られ(段階⑥)、視点取得段階が一段階ずつ移行していく広がりが見られた。

・授業後「昔の人の思いや願いに支えられた町のよさ」への気づきが見られた児童

C段階の児童の特徴を見てみると、3名は教材文の内

容で最後まで考え続け、自分の町についての記述は見られなかったが、それぞれ昔の人の願いがこめられた町のよさを捉える段階◎の他者視点の取得が見られた。児童⑩は、「なんで昔から長く続いているんだろう」と昔の人とのつながりに早い段階で気づき、その後「村を守るやさしい（昔の人の）思い」に気づき、最後に「昔の人の伝えたすごさ」を感じた記述をしており、段階◎の中で、昔の人の願いの理解とすごさについて自分なりに考えを深めていったことが判定できる。児童⑪、⑫も、昔

の人の願いと人々の豊かな暮らしのつながりを感じる記述が見られ、昔の人の願いに深く気づいており、段階◎の取得の達成が判定できた。

以上のことから、児童の視点取得の広がりや段階は、⑩「町の良さ」への気づき⇒◎「昔の人の願い」への気づき⇒⑪「地域への愛着や誇り」への気づき⇒⑫「地域貢献意欲・参画意識」への気づきという段階を経て発達していくと概ね言えるだろう。

表 8 児童の視点取得段階の変化

児童	事前実態調査視点取得段階判定	授業展開部 補助発問 (Ⅰ) 【地域のよさの存在への気づき】	授業展開部 中心発問 (Ⅱ) 【地域の先人の願いに触れたよさへの気づき】	授業終末部 ふりかえり (Ⅲ) 【教材と自分のつながりと今後の自分への生かし】	授業後段階判定
①	⑩	自分の町の石橋をふつうに通っていたけど、そんなにすごい。 ⑩	(記述なし)	町の自慢できるところが何年前から続いているか分かったし、昔の人がやってきたことだから次は自分たちがやらないといけないと分かりました。 ⑩	⑩
②	⑪	ほめられてうれしい。古いのにどうして今でもそのままなのかな。どうして新しいものに作りかえないの。 ⑪	本当に大変でむずかしく、危険な作業なのに石工さんたちががんばって作った石橋だからほこりに思う。 ⑪	わたしはくわしく考えたことがなかったけれど、この時間に考えたおかげで、昔の人の思いなどがよく分かりました。これからも町の宝を守っていきたいです。 ⑪	⑪
③	⑪	うれしい。どうやってこの石橋を作ったのかな？ ⑪	こんなに昔の人たちのやさしい思いがつまっているんだ。 ⑪	ぼくもお茶、ほたる、七夕祭りを大切に受け継いでいきたいです。 ⑪	⑪
④	⑪	わざわざ遠いところから橋を見に来てくれてうれしい。プロのカメラマンが写真を取りに来てくれたのでうれしい。 ⑪	これからもこの橋を大切にしていきたい。この橋がもっと有名になってほしいし、他の石橋も見たいなあ。 ⑪	お話を読んで、町のことが自慢できるのは昔の人たちが努力したりどんどん受け継いでもらって今でも続いているので、その努力をむだにしないように大切にしていきたいです。 ⑪	⑪
⑤	⑪	自分たちの町をほめられてうれしいけれど、なぜ昔の橋のままなんだろう。 ⑪	昔の人たちが願いを一つ一つ積み上げているから院内町の石橋はすごいんだ。 ⑪	今あることは当たり前だと思っていたけれど、この学習をして、昔の人たちが受け継いで大切にしているから、ほたるやお茶、七夕祭りも今でも続いていると分かったから、ぼくも大切にしていきたいと思いました。 ⑪	⑪
⑥	⑪	ほめてもらってうれしいけれど、なぜ昔の形のまま今でも残っているんだろう。 ⑪	荒瀬橋には色々な町の人々の願いがこめられているんだ。僕も荒瀬橋を大切にしていこう。 ⑪	今日のお話といっしょで、町の自慢もただ勝手にやっていたのではなく、町の人たちがずっと大切にしてきたから今でも続いていると思いました。ぼくもあつしさんみたいに町の自慢をもっと知りたかったです。 ⑪	⑪
⑦	⑪	この石橋はずっと残されてきて今もあるんだ。 ⑪	院内町の石橋は、町の人々のほこりだ。 ⑪	町にはいろんな町の自慢があるんだと分かりました。自分も町の自慢を大切にしたいなど思いました。 ⑪	⑪

児童	事前実態調査 点取得段階判定	I. 授業展開 補助発問 (地域のよさの存在への気づき)	II. 授業展開 中心発問 (地域の先人の願いに触れたよさへの気づき)	III. 授業終末のふりかえり (教材と自分のつなぎと今後の自分への生かし)	授業後段階判定
⑧	㉑	自分の町をほめられてうれしい。㉑	石を一つ一つ積み上げるのは自分にはできない。㉓	町の自慢を続けていきたいと思いました。㉑	㉑
⑨	㉑	自分の町のいい所を考えたことがなかったから、そんな風に言ってもらえてうれしい。㉑	石を一つ一つ積み上げて、一生懸命作っていてすごいなあ。㉓	町の自慢を大切にしたいと思いました。色々な人が受け継いできたからです。㉑	㉑
⑩	㉑	昔からある橋だけど、どうやって作ったんだろう。㉓	危険な作業だけど村の人のためにやって、安心して生活できるようになった。㉓	わたしたちの町のお茶、ほたる、七夕祭りは昔からずっと受け継がれてきたことを学んだ。これからもずっと受けつづけることができたらいいな。㉑	㉑
⑪	㉑	自分の町に石橋がたくさんあるってそんなにすごいんだ。㉑	こんなにむずかしい技術の石橋がいっぱいあってほこりに思う。㉑	自分の町の自慢をほこりに思いたい。前の人たちががんばってうけついでいたから。㉑	㉑
⑫	㉓	この石橋はそんなにすごいのかな。㉑	院内町では、町の人々が石橋を大切に受け継いでいるのだから。㉓	町の自慢できるものやことは、昔の人の思いや願いをまた新しい世代に伝えていくことで今も続いているのかなと考えました。㉑	㉑
⑬	㉑	この橋は誰がどうやって作ったんだろう。もっと知りたい。㉓	この橋は、こんなに苦労して作られたんだ。㉓	町の大切さが分かりました。だいたい受け継がれていて、これからも長く続いてほしい。㉑	㉑
⑭	㉑	自分の町のいいところを初めてほめられてうれしいなあ。㉑	石橋を作るのは大変だけれど、村のみんなのためにがんばったんだ。㉓	町の自慢は、昔の人が伝えて、受け継いで大切にしているから今でも続いていることが分かりました。㉑	㉑
⑮	㉓	自分の町のことをほめられて本当にうれしいなあ。㉑	みんなのくらしを守る石橋だからこんなに大切にされているんだ。㉓	わたしたちの町は、長い間続いて有名になっていることが分かりました。昔の地域の人たちがこんなに伝え続けているからだと分かりました。㉑	㉑
⑯	㉓	自分たちの町のことをほめられてうれしい。なんで昔から長く続いているんだろう。㉓	この院内町には昔からすごい所やいい所があったんだ。村を守るやさしい思いがあるんだ。㉓	今日、石橋の学習をして、昔の人たちは今でもこんなに町を守ったり安心してらせるように伝えたりしたからすごいと思いました。㉓	㉓
⑰	㉑	ここはきれいな所でよかった。㉑	自分も石橋を使っているから大切にしたい。町のいろんな人も石橋を使っているから大切にしたい。㉑	きけんなのに、村の人たちのために石橋を作って、いろいろなものが運べるようになったことが分かりました。㉑	㉑
⑱	㉑	そんなにすごいんだ。うれしいなあ。㉑	村の人が安心できるように、みんなのために一つ一つ積み上げていてすごい。㉓	昔の人が石橋をつくったから便利になったと思います。㉓	㉓

## おわりに

本稿では、児童のふるさとへの「見方」の発達段階に着目して道徳科の授業を構成・実践することで、児童の視点取得段階の高まりを確認することができた。道徳科の授業前と授業中、そして授業後の児童の記述内容の変化からは児童の視点取得段階が高まる姿が明らかとなり、最終的には授業参加者全員の、中学年で目指したい他者視点の獲得が判定された。視点取得段階が高まるにつれて、ふるさとである地域への見方や考え方が、「地域のよさへの気づき」から「地域にこめられた昔の人の願い」、「地域への愛着や誇り」、「地域へ発信したり参画したりして地域に貢献しようとする意欲の獲得」へと高まっていくことが明らかとなった。このような結果からは、道徳科において地域への見方や考え方に着目し、それを上げようとする本稿のような実践は、ふるさと教育にとっても有意義であるといえる。このように道徳科とふるさと教育の関連を図ることは、ふるさと教育の充実にとって有効と言えるだろう。

## 参考文献

- <sup>1</sup> 島根県教育委員会（2018）「新学習指導要領の実施に向けて 明日を担う島根の子どもたちのために」（リーフレット）
- <sup>2</sup> 島根県教育委員会（2018）「平成30年度『ふるさと教育基本方針』」
- <sup>3</sup> 文部科学省（2018）「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 総合的な学習の時間編」44-45頁
- <sup>4</sup> 加藤寿朗（2007）『子ども社会認識の発達と形成に関する実践的研究—経済認識の変容を手がかりとして—』風間書房，132-155頁，
- <sup>5</sup> 荒木紀幸「役割取得理論」日本道徳性心理学研究会編著（1992）『道徳性心理学—道徳教育のための心理学』北大路書房
- <sup>6</sup> 雲南市教育委員会子ども政策局（2016）「『夢』発見プログラム（雲南市キャリア教育推進プログラム）小学校・中学校版」
- <sup>7</sup> 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門会議（2016）「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」6頁